古代史に遊ぼう

第 39 回 － 生駒山地を巡る 1)ニギハヤヒの降臨 －

生駒山地の北端、交野市の南部に磐船神社がある。祭神は天孫の一族であるニギハヤヒ（天照国照彦天火明奇玉饒速日尊）で、天磐船に乗って草香山（饒速日山）に天降ったと日本書紀に記されている。初秋の晴れた１日、生駒周辺探訪のスタートに磐船神社を訪れた。北田原から国道１６８を北進、鬱蒼とした天野川渓谷の森の入り口で車を降り、一寸歩くと右手に巨岩がある。よく見ると船の舳先のような形をしている、これが天磐船で神社のご神体である。実際は東遷してきたニギハヤヒ一行は波浪に耐える堅牢な樟材の船、磐樟船（準構造船）を使っていたのであろうと考えられている。そして大阪湾から水路で河内湖に入り、草香江に到り或いは更に淀川･天野川を遡ったと推定されている。この天野川遡上のルートは山越えをせずに大和中心部に入る好ルートである。

●写真：磐船神社

天降ったという草香山､一名饒速日山は「磐船神社御由緒」には、河内国河上哮峯（いかるがのみね）と書かれている。この山に源を発し､西北に流れて､善根寺の車谷を下り、（旧）日下池に注ぐ川は「日の川」と呼ばれている。「日の川」の河上の哮峯が草香山で、その尾根の末端が善根寺のあたりで、そこを「日の御前」と称し、そこに「日の川」が流れている。これらは草香山にのぼる太陽を礼拝し、日の神であるニギハヤヒを祀った痕跡である。現在の国土地理院の地図（１：２５，０００生駒山）では、スカイラインの宝山寺と信貴山への分岐点のすぐ北にある標高４０２ｍのピークがそれにあたる様に思われる。

ここで注目すべきは、降臨に際しニギハヤヒが国見をして「虚空見つ日本の国」（そらみつやまとのくに）と云ったという説話である。記紀･風土記を通じて天皇･皇祖神以外の国見説話は極めて稀であり、ニギハヤヒの特異的な地位を示すものとされる。イワレヒコ（神武）が九州から本州の中心である河内･大和に進出する以前にニギハヤヒが東遷し、根拠地を構えた重要な史実を示している。この日本（やまと）が後に「日本」という国号となったので、ニギハヤヒは「日本」の名付け親である。この日本列島の中に、一時期「倭国」と「日本」という２つの国があったことは、中国の「新唐書」に記録されているという。

北田原に戻り、清滝トンネルを西にくぐって左折、東高野街道を南下すると電柱に日下町（東大阪市）の標識が現れた。古事記では「日下」と書いて「くさか」と読み、日本書紀では「草香江」と書き「くさかえ」と読ませている。河内平野は縄文時代には海であり､生駒山地の麓まで海の水が入っていた、それが段々と淡水化し潟湖に変わって行き、その潟湖の東の奥一帯が草香江と呼ばれていた。「日下」とは東方にあって､太陽のでるところの意であると漢代の最古の辞書にあることから、「日の下の草香」という地名が古くから存在し、そして後に「草香」を「日下」と書いて「くさか」と読ませるようになったと谷川健一氏は推理している。日本書紀によれば、九州の日向から難波の津に侵入､草香江に上陸し山越えをしようとした神武勢は､この地でニギハヤヒを戴く長髄彦の軍に苦杯を喫した。敗因は太陽に向かって戦を仕掛けたためであるとし、そこで熊野に回って北上し太陽を背にして戦う戦略に転換したという。

●写真：日下町の標識

●写真：石切劍箭神社絵馬堂

日下町のすぐ南で近鉄けいはんな線の新石切駅手前を左折し、坂道を上ると石切劍箭神社である。祭神は饒速日命と可美真手命（宇摩志麻冶命・ウマシマジ、ニギハヤヒの息子で物部氏の祖）で、この神社は「石切さん」「でんぼ（腫れ物を鋭い劍で切り落とす）の神様」として親しまれており、また本殿前と神社入り口にある百度石のあいだを往復する百度参りは、早朝、雨の日も風の日も人の姿が絶えないことで有名である。屋根に象徴的な劍の建てられた建物・絵馬殿を通り、まず拝殿にて参拝する。両側に店の建ち並ぶ参道は参詣客の賑わいを想像させ、道はかなりの上り坂で近鉄石切駅に通じている。もとは草香山にのぼる太陽が礼拝されていたが、その太陽の象徴であるニギハヤヒを祀る上ノ社がのちに山の頂上にもうけられ、それに対してこの東大阪市の石切劍箭神社は下ノ社と呼ばれた。そのあと、物部氏が滅ぶと、山上のニギハヤヒの霊は下ノ社に移されたのだという。

「石切さん」をでて、南下したあと東に坂道を上って、近鉄額田駅の北で踏切を渡り、線路に沿って南へしばらく行くと暗峠に通ずる旧街道がある。それを過ぎると近鉄枚岡駅で、その左手の高所に枚岡神社がある。河内国一宮で中臣氏の祖神・天児屋命を祀る神社であり、奈良の春日大社は枚岡神社から天児屋命を勧請していることでも知られている。中臣氏は祭祀を継承する氏族であり、物部氏とともに「仏教伝来に反対して命を張った」歴史がある。しかし藤原氏の祖・鎌足は中臣氏の出自であるとされているが、それについては疑問もあるといい、物部麻呂は藤原氏によって、平城京遷都に際し藤原京に捨ておかれた。この地に二本の劍を立てた枚岡神社があると云うことは、暗峠に通ずる要所を押さえて、かつての同盟者･物部を監視しているのではないかとも思われる。

●写真：枚岡神社

生駒山地の北東麓には白庭台という近鉄の駅があり、ニギハヤヒの遷ったという鳥見白庭山を標榜し、周辺の山裾に饒速日命墓（石碑）、長髄彦本拠地石碑、金鵄発祥の処石碑などが点在する。しかし、森浩一氏は、「大倭国の鳥見白庭山」は奈良盆地の中心である磐余に近い場所であるとしている。鳥見は奈良盆地での神武軍の最後の戦いにおいて、金色の鵄が神武の弓の先端に止まり、勝利をもたらしたという神話の場所である。鵄の止まった土地を鵄邑（トビムラ）というようになり、なまって「鳥見」というようになった。鳥見は鎌倉時代からは今日まで外山（トビヤマ）と書いている。鵄の地名が先か、それとも外山（トビ）という地名から鵄の神話が作られたかのどちらかであろう。桜井市の南東にある鳥見山山麓の地で､磐余の東方に隣り合っている。注目すべきは外山に代表的な前期の前方後円墳があり、櫻井茶臼山古墳と呼ばれていたが、森氏は歴史的に由緒のある大字名をつけ外山茶臼山古墳と呼ぶことを提案し、そしてこの古墳の被葬者として、ニギハヤヒが浮かび上がるという夢のある話を語っている。さて、次回は引き続きニギハヤヒと物部について別の観点から論ずることとしたいと考えている。

（岡野　実）

≪写真の使用掲載をご許可頂いた吉本吉彦氏に感謝いたします。≫

文献　１）　敗者の古代史　森浩一、(株）中経出版　（２０１３）
　　２）　隠された物部王国「日本」　谷川健一、情報センター出版局（２００８）